

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520229

研究課題名（和文） フランス15・16世紀の愚者演劇にみる聖俗混淆の知的パラダイムの  
歴史的文化的研究研究課題名（英文） A historical, cultural study on the intellectual paradigm of the  
mixture of the sacred and the profane in the 15<sup>th</sup> and 16<sup>th</sup> century French sottie

研究代表者

川那部 和恵（KAWANABE KAZUE）

東洋大学・法学部・教授

研究者番号：70332765

研究成果の概要（和文）：

本研究では、フランス15・16世紀の「愚者」演劇における聖・俗混淆の知的パラダイムの状況を確認してその特質を明らかにし、同時に、その形成は、古代以来の思想や文化における道化の認識論史の伝統と、作者たちの学んだ当時の大学で展開された聖・俗の多様な学知に基づく知識人文化、さらには彼らの聖・俗にまたがる生活環境を背景としつつ、最終的にはこれらの交差するところに成立しているのではないかという解釈に達した。ここには、キリスト教的中世文化と異教由来の人文主義がダイナミックに混じり合った当時の歴史的転換期において、新たな知を模索する一つの挑戦のかたちが認められる。

研究成果の概要（英文）：

In this study, firstly, I examined the situation of the intellectual paradigm of the mixture of the sacred and the profane, to clarify its characteristic. Secondly, about the formation of this paradigm, I reached the following interpretation: it may have begun with the encounter of three elements, namely the ancient tradition of an epistemological history of fools in thought and culture, the intellectual culture based on a variety of sacred or secular learning unfolded at the universities where authors learned, and the environment of their life extending over two worlds sacred and secular, etc. We can recognize here the challenge to grope for new intellect on the historic turning point characterized by a dynamic mixing of Christian Middle Ages culture and the humanism which comes from paganism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：仏文学、中世演劇

## 1. 研究開始当初の背景

フランス15・16世紀の世俗劇には、愚

者ないし道化（sot / fou）的な人物が、ソテ  
ィを中心にファルスやモラリテなど、ジャン

ルを問わずおよそどこにでも、単独であるいは集団で出没、登場する。彼らは人物としては見たところ素朴で泥臭く、従来の研究ではもっぱら、愚か者の類型として民話や民衆劇と関係づけて、あるいはそのいわゆる道化特有の曖昧で多義的かつ豊饒な性格に着目して民衆文化の観点から、研究、解釈されてきた経緯がある。しかし、台詞や議論を詳しく検討してみると、じつはその一見バカバカしく冗談めいた発言ややりとりには、何らか知的な意図と姿勢の見え隠れするのが見てとれるのである。その知性とはいかなるものか。そしてまた、世俗劇という中世末からルネサンスにかけてさかえ、いっとき社会現象化した演劇を牽引したといえるその知性は、歴史的、文化的文脈のなかで何を見据えていたのだろうか。

フランスのルネサンス前夜とも言いうるこの時代は、キリスト教的な聖なるものの観念が地滑り的に変化し始めた時代であった。それまでヨーロッパ精神をその基底において無意識のうちに規定していた聖性のあり方は、俗との関係において強く規定されるようになり、一方で俗に対して称揚の対象となり、他方で俗による揶揄の対象となった。そうした文化史的な動向はときの演劇にも投影され、世俗劇は揶揄の側面を担ったと考えられるのであるが、しかし、その道化的人物についていえば、そこには聖を揶揄しつつも称揚するというアンビヴァレントな様相が観察される。このように同一人物に共存する聖と俗のいわば葛藤の関係は、当該人物の弁証法的言説すなわち知の方法のありようとも照応しており、ここに、道化の仮面の下の作者・演者たる時の知識人の思考と精神の一端を見てとることができる。ここから、当時の聖・俗に対して大きな意識変化が生じた時代において、その中樞で心身ともに聖俗の混

淆の中に生きた自称患者の知識人作者の知のあり方という問題性が浮上したのであり、これを本研究課題と設定して、その知のパラダイムとこれにまつわる歴史的、文化社会的な背景の解明を目指すこととした。

## 2. 研究の目的

本研究は、フランス15・16世紀の世俗劇に関して、患者ないし道化のトポス、聖・俗の関係性、そして認識論の三つの領域にまたがる視点から光りを与え、転換期の文化の一翼を担ったフランスの演劇道化の知のあり方を聖と俗の枠組の中で解明しようとするものである。研究の展望としては、究極的には作者（集団）の思考や精神を見据えて、彼らの分身と目される作中の道化的人物の言説に表れた知の形式が、聖と俗との関係性においていかなるものであるかを考察するとともに、その知のパラダイムが世俗劇の作者たちにおいてどのようにして形成されていたのかを歴史的・文化的に跡付けて、同時代のフランスの道化を聖・俗・知の視点のもとに捉え直そうとするところにある。作者とは当時のエリート層に属する法律関係者であり、彼らが仲間うちで組織したこうした集団にはそれ故、おのずから当時の時代思想を反映する共通理念や精神が貫いていたと思われる。そうした知的な存在がその道化の仮面の背後に秘めた思考を聖と俗の枠組から照らし出すことにより、巨大な歴史的転換期にあったフランス中世末の知のパラダイムに新たな理解を提示すること、を目指す。

## 3. 研究の方法

作業は、原典研究、歴史的背景の研究、文化社会的背景の研究、および総括、という手順で行った。以下に各年度ごとの内容を示す。

(1)初年度：

本テーマの基盤的部分をなす原典研究に従事した。世俗劇の作中、道化(的人物)の言説に表れた知の形式が聖と俗との関係性においていかなるものであるかという観点から、関係テキスト(ソティ、ファルス、モラリテ、滑稽説教の撰集 *Recueil général des sotties*, 3 vol. éd. E. Picot; *Recueil Trepperel: les sotties*; *Recueil du British Museum*; *Recueil Cohen*; *Recueil Trepperel: les farces*; *Recueil de sermons joyeux*, éd. J. Koopmans; 他)の解読・分析・考察を行った。

(2)2年目：

初年度からの継続として原典研究を続けると同時に、すでに行ったテキスト分析から得られた結果を視野に入れつつ、そうした演劇道化の知のパラダイムがどのようにして形成されたのかを、道化をめぐる認識論の歴史の中に探った。古代から中世、ルネサンスに至るまでの道化に関する認識観を哲学、神学、文化、文学、社会等のさまざまな分野に調査し、聖と俗の視点から考察した。

(3)3年目：

初年度より継続の原典研究と並行して、問題の背景を作者の周辺に探った。彼らの置かれていた知的状況と社会的背景を、聖と俗の視点から洗い直すべく、当時の大学における修学内容の調査、特に、自由七学科のうちで最も重要視されたといわれている弁証法の内容や、哲学・神学さらに人文主義的学問にかんする彼らの知識や関心・関与のあり方について、また学生ないし法廷書記としての彼らの生活や立場について、さらに、演劇集団の母体としての祝祭組合の実態についての詳しい調査と考察を行った。

(4)最終年度：

3年にわたり進め、蓄積してきた研究成果の突き合わせと補足的検討を行って、総括とする。

4.研究成果：

世俗劇の道化的言説にあらわれた知の形式における聖・俗の関係性のありようとその形成の背景を、原典研究および歴史的、文化社会的研究をとおして考察するという、本研究課題から得られた主な成果は以下のとおりである。

まず、この知のあり方が俗(理性、論理)と聖(直感、神秘)のあいだで果てしなく揺れ動いていることが確認された。そしてこの聖と俗をめぐる葛藤的側面の形成は、古代以来の思想や文化における道化の認識論の変遷の中で歴史的に付与されることになった性格であると同時に、知的作者(集団)が大学で得た新旧の学知や議論(弁証学、修辞学、認識論、神学、普遍論争、人文主義、等)さらには彼らの置かれていた生活や立場(例えば学生は聖職録をもらっており、裁判関係者は聖俗混成組織であった)等に由来するもので、それらが不可分に混じり合って生起しているものと考えられる。この知の枠組は、ルネサンスという、キリスト教の中世文化と異教的人文主義がダイナミックに混じり合った歴史の転換点において、その鏡像であるとともに、新たな知を模索する挑戦のかたちといえることができるだろう。

従来の世俗劇研究がもっぱら作品と作者は切り離し、研究の切り口もそれぞれ単独の視点に置き、また、聖性とは無縁のジャンルという前提のもとに論じられてきた歴史において、これは全く新しい企てである。愚者演劇を聖俗混淆という時代の知的パラダイ

ムを積極的に担うものとして捉える当歴史的文化的研究は、フランス中世末における道化をめぐる聖・俗と知のあり方の研究に、今までの視点を一新する新たな可能性を創出するものである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Kazue KAWANABE, Le jeu d'errance entre le sacré et le profane : Sots en quête de la connaissance de soi dans le théâtre profane des XVe et XVIe siècles, in *Le voyage créateur, Expériences artistiques et itinérance* ( E. Bonnet 編、L'Harmattan, Paris, 2010 ), pp.37-44. 査読有。

川那部和恵、フランス15～16世紀の演劇状況 世俗劇の上演現場、奈良教育大学紀要、Vol. 57, No.1, 2008, pp.191-198. 査読有。

[学会発表](計1件)

Kazue KAWANABE, Sur la relation acteur / public dans la notion de « théâtre pauvre » de Jerzy Grotowski, 国際研究集会 « Les liens du peu », 2008.11.23, 筑波大学。

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

川那部 和恵 (KAWANABE KAZUE)

東洋大学・法学部・教授

研究者番号：70332765

##### (2)研究分担者(0)

##### (3)連携研究者(0)